母のひろば708号　2023年5月15日発行

母のひろば 708

doshinsha / haha no hiroba

道草日記①／大野八生　2
作家と画家があうとき⑧／石川えりこ　3
「せかいのあいさつ」（全3巻）刊行記念インタビュー／岡本啓史　4
わたしの原風景㊲／長谷川義史　6
子どもたちのともだち、だんちゃん！／近藤初江　7
イラスト／はらぺこめがね

「子どもの自然」を一緒に楽しむ

久保 敬

2007年、「全国学力・学習状況調査」いわゆる「全国学テ」と呼ばれる全国統一テストが始まりました。当初文科省は、その目的を教員の指導力向上に役立てるためだと説明していました。それが、いつの間にか都道府県ごとの平均点が公開されるようになり、子どもたちが１点・２点を競争させられていきます。大阪市では、学校ごとの平均点までもが学校選択制の資料として公開されており、全国学テの点数による学校の序列化が進んでいます。そして、教職員は「エビデンスだ、アカウンタビリティだ」と数値による成果によって評価され、管理されていきます。そして、様々な事務処理業務に追われ、子どもと一緒に学習や遊びを楽しむことが難しくなっています。子どもも先生も忙しく、まるでミヒャエル・エンデの「モモ」に登場する“時間どろぼう”の世界のようです。残念ながら、不登校の子どもたちは増える一方です。

学校とは、優劣を競い合ったり、できる・できないで比べられたり、分けられたりするところではありません。１人１人ちがうからこそ楽しく、誰もが安心できる居場所でなければならないと思うのです。子どもが生まれながらに持っている力、つまり「子どもの自然」は、本当にワンダフルです。しかし、その「自然」を発揮する環境がどんどん失われています。やらなければならない教科書の内容があまりにも多く、子どもたちが本来持っている好奇心や探求心が元気を失っているのです。子どもたちが、「今ある力」を使って様々にチャレンジし、安心して失敗も経験できる環境を整え、それを一緒に楽しむことこそ、学校の大切な役割ではないでしょうか。

ぼくは、37年間大阪市の小学校に勤め、昨年３月末に定年退職しました。まちがったこと、できなかったこと、やらなかったこと、心の中で子どもたちに謝り続けなければならないことは数えきれません。しかし、教師という素晴らしい仕事に巡り会え、子どもたちと泣き笑い、一緒に過ごせた日々は、本当に幸せだったと感じています。今、教員志望の学生が減っています。また、心の病で休む教員、辞めていく教員も少なくありません。学校現場は深刻な教員不足のため、さらに多忙になり、疲弊していくという悪循環に陥っています。しかし、「子どもの自然」にふれることができたなら、きっと誰もが元気を取り戻せるにちがいありません。「子どもの自然」を一緒に楽しむ教師という仕事の面白さ、喜びを伝えていくことが、これからのぼくの役目だと感じています。

（くぼ たかし／元大阪市立小学校長、NPO法人SVP理事）

道草日記 1

大野八生
（イラストレーター・造園家）

5月、ヘビイチゴ

子どもの頃、獣医になりたかった私は、庭でザリガニ、亀、金魚、チャボ、イモリなどたくさんの小さな生き物を育てていました。祖父は、植物が大好き。趣味で菊や桜草、盆栽などを育てていました。

幼稚園や学校に行く以外、私と祖父は、一日のほとんどを庭で過ごしていました。友達と遊ぶより、庭にいるのが好きな私。庭で過ごす時間が長く、園芸作業を手伝うことも、自然と身についてゆきました。

ある日の帰り道、いつも通る家のお庭に赤くて小さな実がなる草を見つけました。あのかわいい、美しい植物はなんだろう？　しばらく眺めていると、家の人が出てきて「ヘビイチゴ、好きなのかい？　少しあげようか」と言ってビニール袋に入れてくれました。「ありがとうございます」私はとても嬉しくなり、急いで家に帰りました。

さて、どこに植えよう？　祖父に相談してからの方が良いに決まっているのに、なんだか自分で植えてみたくなり、ビール瓶を土に差し込んで作った、祖父ご自慢の花壇の隅に勝手にそっと植えました。夏から秋になり、ヘビイチゴ、元気に成長してゆきました。

次の春、花壇いっぱい赤い実が！

まずいかも！

「こんなにヘビイチゴあったかな？」

ポツリと言って、祖父はニヤリと私の顔を覗き込みました。ヘビイチゴ、私がはじめて庭に植えた植物なのです。

作家と画家がであうとき ❽
『こくん』

村中李衣・作／石川えりこ・絵
2019年6月刊行

李衣さんへ

石川えりこ

お手紙をありがとう。うちの川沿いの桜がようやく咲き始めました。昨年も来てくれたツバメたちも、またベランダを覗いています。今年こそは巣をかけてほしいなぁと思っています。

『こくん』が出版されたのは二〇一九年だね。同時進行のように『あららのはたけ』（偕成社）も手がけていましたね。大変だったけど、私には実験的な試みでもあったのでワクワクした作品作りでした。

学生の頃、田畑精一先生から絵本作りについて学んだことがあります。『おしいれのぼうけん』について多くのことをお話しして下さいました。絵本など本作りを編集と絵と文の三位一体で作っていて、この三人の力をセッションしながら、創り上げていくのだと。話を伺いながらいつか本作りに携わることができたら、私もそのように作ってみたいとずっと心に決めていました。

『こくん』の完成した絵を編集の永牟田さんにお渡しして、絵本仲間と旭川のあべ弘士さんを訪ねる旅にでました。あべさんに絵本『ちび竜』のお話もお聞きしたくて電車に乗りました。いつも気遣ってくれる友人が、「考え事があるのなら一人で離れて座っていいよ」と言ってくれました。よほど私が考え事をしているような顔をしていたんでしょうね。そう、実は渡した『こくん』の絵が気になって、ラフを全部抱えてきていました。

気になっていたのは滑り台の表情。制作中に参考資料として滑り台の写真が李衣さんと永牟田さんから山のように送られてきていました。人の意見に引きずられる事は今まであまりありませんでしたが、今度ばかりは迷いましたね。資料に押されて、主人公のちさとちゃんの前にそびえ立つ大きな滑り台の、存在そのものの声が聞こえてこないのです。「声が届かない」と思いながら描いた滑り台に私自身が納得いかないまま原画を渡してしまっていた事に今頃気づいていました。電車に揺られながら、「あ！」と気づきました。空に登る「ちび竜」と、ちさとちゃんがのぼる滑り台の階段が、ふと一つに重なったのです。ささっとミニラフを描いて写メをとり、すぐに永牟田さんに送りました。「永牟田さん、こう描き直したいけど、いい？」と言葉を添えて。

李衣さんと永牟田さんが、どこでどんな話をしていたのか全然知らない私は、提出していた自分の絵に「描き直し！」と心の中で付箋をはっていたのです。絵から離れてようやく滑り台の声がちび竜に乗って届いてきたんだ！　田畑先生が笑いながら「三位一体の絵本創り、まだまだだね。」と言われたような気がしましたよ。

（いしかわ えりこ／絵本作家）

この春、『せかいの「おはよう」』『せかいの「ありがとう」』『せかいの「あそぼう」』の三冊の絵本が刊行されました。この「せかいのあいさつ」シリーズでは、一冊につき六カ国の世界の子どもたちのそれぞれの暮らしを、あいさつからはじまる短いお話で紹介しています。いきいきと描かれた十八カ国、十八言語、十八人の子どもたちを通して、それぞれの国の空気を感じながら、異文化への関心や理解が自然に深まります。シリーズの監修者であり、これまで四十カ国以上の教育支援に携わってこられた国際教育家の岡本啓史さんに、お話を伺いました。

「せかいのあいさつ」刊行記念インタビュー

全3巻

「せかいのあいさつ」シリーズ
せかいの「おはよう」
せかいの「ありがとう」
せかいの「あそぼう」
こがようこ／文　下田昌克／絵
岡本啓史／監修
定価各1760円
（本体1600円＋税10%）

岡本啓史（おかもと・ひろし）

国際教育家、生涯学習者、パフォーマー。世界の子どもに学びと笑顔を届けることを目指し、国連や国際NGO などで勤務。これまで世界５大陸に住み、４０カ国以上の教育支援を実施。ダンサー、役者、料理人としての経歴ももつ。国際理解や幅広い学び促進のために、ライフスキル教育、制作、講演活動などを行う。著書に『なりたい自分との出会い方』（岩波書店）。学びに関する多言語ブログ：mdhiro.com

いろんな「色」の魅力に触れる

監修するにあたって、たくさんの国の人に事情を聞いたのですが、そのときにこの本の説明として伝えていたのが、「世界の多様性を推進する絵本なんだ」ということでした。世界にはいろんな色があって、それがどんな色であってもいいんだよと肯定してくれるシリーズだと思ったからです。

私は、これまで四十カ国以上の国や文化に直接触れてきました。いろんな国を知れば知るほど「世界はこうだ！」という答えがないことを痛感します。こういう世界もあり、また全然違った世界もある。ページをめくるたびにそんな多様性が感じられる点が、このシリーズの最大の魅力だと思っています。

それぞれの国のお話の最初に、子どもたちが現地の言葉であいさつをしてくれますが、そのふきだしの色が国ごとに違っているのも象徴的です。

食事の場面、行事や遊び、家や学校、風景についても、それぞれの国の文化の違いが、敬意をもって細かく描かれています。

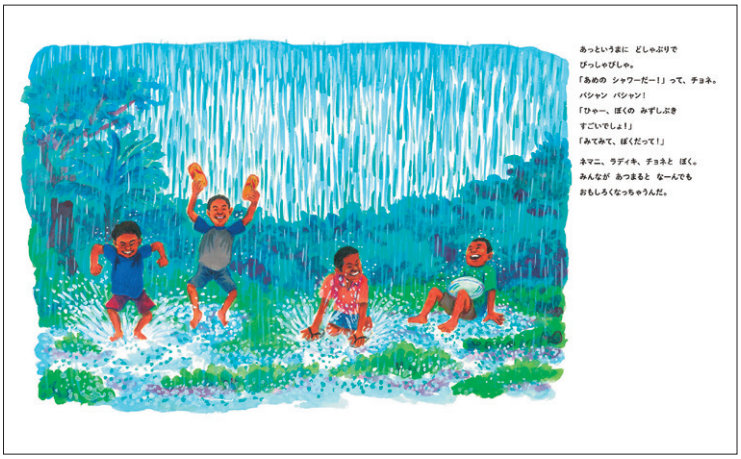
子どもたちもさまざまです。こがさんのテキストと下田さんの絵によって、子どもたちはいきいきと表現されています。それぞれに個性をもって、そこに実在するように描かれた子どもたちの姿からは、ひとつの国のなかにも多様な子どもたちがいて、それぞれ独自の色をもって輝いているということが伝わってきます。

『せかいの「あそぼう」』に出てくるモンゴルのお話に、弟がお姉ちゃんに、「シャガイ」という伝統的なおはじきのゲームを一緒にやろうというシーンがあるのですが、以前私がモンゴルの遊牧民の家族のもとを訪れたときに、小さな男の子が近くにやってきて、ジェスチャーで「これっ」とシャガイを差し出してきたことがありました。

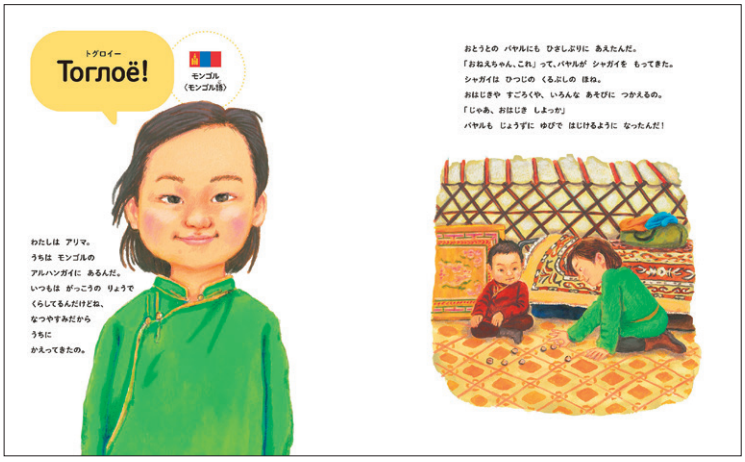
絵本で描かれているゲルや男の子の様子は、それをまざまざと思い出させるような丁寧な描写でしたし、一方でそれをやさしく受け止めるお姉ちゃんには、家族のきずなを大事にするモンゴルらしさがしっかりと表れています。

いろんな国のことを「自分事」に

また、『せかいの「おはよう」』ではいろんな朝ご飯が出てきますが、アメリカではお父さんが、フィンランドではお母さんが、トルコではおばあちゃんが作ってくれています。子どもたちの服装や色づかいもさまざまで、差別や格差を助長するような表現にはなっていません。多様性を大切にしている絵本だからこそ、丁寧に描かれていることがわかります。



フィジーの子どもたち（『せかいの「あそぼう」』より）



モンゴルの姉弟の場面（『せかいの「あそぼう」』より）

また本作では、日本に住んでいる人が多い国や言語の重ならない国が選ばれていますが、モーリタニアやフィジーなど、日本人にあまりなじみのない国もとりあげていて、国のラインナップも多様です。

いま世界では、差別や貧困、紛争、災害に環境問題など、問題が山積しています。それらの解決は、ひとりひとりが興味を持って他の国や地域を知って身近に感じることから始まるのだと思います。世界のことを「自分事」にする第一歩として読んでいただけたら嬉しいですね。

かけ橋としての「あいさつ」

たくさんの国を見てきた中で、多様性を実感する反面、それでも世界はひとつなんだと教えてくれるのが「あいさつ」です。「おはよう」で一日の扉を開けて、「ありがとう」と感謝の気持ちを伝え、「あそぼう」で楽しく人とつながる――これはどの国でも共通していますね。あいさつは、人と人とが関わっていく中で、最も大切なことのひとつだと思います。このシリーズが「あいさつ」を軸にストーリーを描いているのは、世界の国々をとりあげるうえでとてもふさわしいと思っています。

教育界でも、あいさつがいま見直されています。従来の、読み書き・計算中心の教育から、なかなか数値化できないけれども、人生を豊かにする力＝非認知スキルへと注目が集まっています。非認知スキルの大きな枠組みの中に「周囲との関わり」という視点がありますが、そこで欠かせないのが、あいさつなのです。

スマホやSNSが普及して世界中の誰とでもコミュニケーションが取れる時代だからこそ、人とちゃんとあいさつができるかどうかが大切になってきています。よく考えると、「ありがとう」も「あそぼう」も、相手のことが見えてないと言えない言葉ですよね。あいさつは、他者を見つめ、それを通して自分を見つめるきっかけにもなるのです。

読者に向けてのメッセージ

この絵本を読んで、まずはいろんな世界があるんだということを知ってほしいです。そして、少しでも興味がある国があれば、ぜひ足を運び、いろんな人に出会い、あいさつを通して、たくさんの経験をしてほしい、そう願っています。

海外には行けなくても、アンテナさえ張っていれば、違いに目を向け、気づくことができると思います。言語でも、食事でも、遊びでも、この絵本に描かれていることで気になったことがあったら、自分なりに深掘りしていってもらいたいです。自分の住んでいる地域でも知らない世界があるだろうし、きっとさまざまなルーツやストーリーをもった人たちがいるでしょう。それらの違いを知ることは、自分の世界を広げられるチャンスでもあるのです。

そして違いがある一方で、必ず共通点もあるはずです。違いがあることで学びになるし、共通点があることで親しみを持てる。二つの大事な要素をこのシリーズで感じ取ってもらえたら嬉しいです。

わたしの原風景 37

長谷川義史
はせがわ よしふみ／絵本作家

田んぼしかない中途半端な、田舎でもない都会でもないそんな町に生まれた。

一つ屋根の真ん中に壁があり、二軒並び向かって左側。その左手に古い井戸がある家やった。

井戸に猫が落ちる事件があった。近所のおっさんおばはんが出てきて、釣瓶を落として助けようとしたけれど猫は死んでしもうた。

初めて見る、生きてるもんが死んでしまう出来事やった。

縦の桟が所々古う朽ちている、それでも曇ったガラスの入った歪んだ戸を右に引くと、小さな玄関があった。

上がって二畳、右手に四畳半、奥に三畳、その左に板の間のだいどこ。

日の当たらん四畳半が我が家の集いの間兼応接間で寝間。

夏の日。れえぞうこを開けると、銀に光るいつもは入ってないもんが、開けた扉の方に尻を向けて横になっていた。

ビールの缶や。ドキッとした。

昼間のことでおとうちゃんもおかあちゃんもねえちゃんもいてえへん、ぼく一人。

ぼくは気を抑えきれずにビールの缶の吸い口を開けた。

開けてしもうた。金具に指を差し込んで開けてしもうた。

子どもの我には大人の硬さやった。硬いから顔が歪んだ。

急な空を切る音がした。少し濁った白い泡が、中から出してくれたかというように噴き出た。

怖くなって泡の缶を握り土間に下り裏から出て、向こう隣の家の便所の無花果の木の周りに生えた草に投げた。

夜おとうちゃんが帰ってきて楽しみにしていた缶のビールがないと騒動になった。おかあちゃんに「知らんか」と聞かれた。

ぼくは「知らん」とはっきり答えた。

「なんで無くなったんや」おとうちゃんおかあちゃんは合点がいかん。ぼくはしらん顔して飯をくた。

子どもたちが夢中！
「むしのたまごシリーズ」最新刊

『だんごむしの だんちゃん うまれたよ！』

たけがみたえ 作・絵
須田研司 監修
定価1430円
（本体1300円+税10%）

子どもたちのともだち、だんちゃん！

近藤初江

暖かい春の3歳児クラスに、ひとりの男の子が転園してきました。保育園生活には慣れているものの、新しい環境で少し不安そう。はじめは先生にくっついて生活していました。

雨さえ降らなければ、近くの公園に毎日散歩に向かいます。お目当てはダンゴムシです。シャベルや木の棒を持って枯れ葉の下をゴソゴソすると、まだ寒そうに丸まっているダンゴムシをたくさん発見！「いたいた、ダンゴムシ！」だれかが声をあげました。「どこどこ？　見せて！」みんなが集まってきます。すぐ手にとってみる子。大きいダンゴムシを見つけて喜ぶ子……。そのうち、いつも先生にくっついていた男の子も先生から離れて、ダンゴムシ探しに夢中になっていました。

ダンゴムシ探しは、子どもたちが保育園に慣れていく中で大切な遊びでもあるのです。

保育士経験の長い私はダンゴムシのことをよく知っているつもりでしたが、今回『だんごむしの だんちゃん うまれたよ！』を読んで、驚きや新しい発見がたくさんありました。

例えば、脱皮はうしろと前、半分ずつすること。脱皮した殻は食べること。四角いフンをすること。また、ダンゴムシには敵がたくさんいて、アリやカエルなどに食べられないよう、自分で身を守らなければならないこともわかりました。

そして、いちばん驚いたのは、あかちゃんがうまれても自分で動きまわれるようになるまで、お母さんのお腹の膜の中で過ごすということです。お母さんダンゴムシは、大切に大切に、新しい命をうみだすのですね。

私は物語の中で生態がわかるような絵本が、子どもたちに必要だと考えています。図鑑では虫の名前や形、色など知識だけを覚えることになりますが、絵本では時間を追って虫の生態を目で確かめていくことができるのです。子どもたちは絵を見て物語を理解していきますから、より一層印象に残るでしょう。

そして何よりいいのは、絵本はともだちと一緒に共有できるということです。実際に虫のかたわらで、みんなで絵本を読むと話がはずみます。

『だんごむしの だんちゃん うまれたよ！』は、まさにそのような絵本で、ストーリーを追いながらダンゴムシの生態を知ることができるのです。

また、虫が苦手な子もいる中で、小さな小さな虫を大きく描くことは案外難しいことだと思います。子どもたちが感情移入し、親しみを持てるような表情が必要です。このだんちゃんは、マンガチックになりすぎず、生態を残しつつ、かわいらしさが伝わる絶妙な絵だと思います。

さて、子どもたちは見つけたダンゴムシを飼育ケースに入れて飼うことにしました。「だんちゃん、かわいい」という声が！　名前は「だんちゃん」になりました。

（こんどう はつえ／元桜田保育園園長）

読者の声

お話の中でこん虫の成長も
みることができます。
生きもののふしぎが
たくさんつまった本ですね！
（新潟県 A）

むしのたまごシリーズ
須田研司 監修

かたつむりの でんでんちゃん うまれたよ！
たけがみたえ 作・絵

かぶとむしの ぶんぶんちゃん うまれたよ！
ねもとまゆみ 作
たけがみたえ 絵

とんぼの ぎんちゃん うまれたよ！
ねもとまゆみ 作
たけがみたえ 絵

『だんごむしの だんちゃん うまれたよ！』発売記念
著者たけがみたえ先生のインタビューはこちらから。

５月の新刊図書！

あかちゃん　とととととと

かさ　さして

三浦太郎／さく・え

定価880円（本体800円+税10%）

雨がふってきて、こなすの子どもは、れれれれれ。
かぼちゃの母さんは、げげげげげ。でもみんな、
ぱっとかささして、うれしそう！

単行本図書

おきにいりの しろいドレスをきて レストランにいきました

渡辺朋／作　高畠那生／絵

定価1650円（本体1500円+税10%）

お気に入りの白いドレスにケチャップが！
「ががががーん！」ショックはみんなに伝わって……。擬音が連鎖するナンセンス絵本。

読者の声

ももんちゃん　あそぼう

ももんちゃんと ももんがくん

とよたかずひこ／さく・え

定価９９０円（本体９００円+税１０%）

ももんちゃんの新刊を本屋で見つけ、すぐに買い求めました。二才十カ月になった娘（長女）に何も言わず、本棚に入れておいたら、たくさんある本の中からすぐに見つけて「よんで！」とせがまれました。六カ月の次女も一緒に、楽しく読ませていただきました。（香川県　Ｋ・Ｈ　四三歳）

とことことえほん

ちょきちょき

中新井純子／作・絵

定価１１００円（本体１０００円+税１０%）

「ちょ　ちょ　ちょ」など、耳に残るリズムが楽しく、絵もかわいいです。私も子どもも大好きな絵本になりました。（広島県　Ｈ・Ｔ　二八歳）

14ひきのシリーズ

14ひきのさむいふゆ

いわむらかずお／さく

定価１４３０円（本体１３００円+税１０%）

私が幼いころ、母が読んでくれた「14ひきのシリーズ」に再会したのは、２人目出産のときの里帰り中でした。長男は赤ちゃん返りで反抗がひどく、毎日向き合い方がわからず、辛い日々でした。「育て方まちがったかな……」と悩んだり、叱りすぎて自己嫌悪になったりしました。そんな時、この絵本を一緒に読むと息子の目線に気づかされたり、自分の幼い頃のことを思い出したり、心が軽くなりました。息子との新しい関係作りの第一歩となってくれた、14ひきのねずみと作者のいわむらかずおさんに心より感謝を申し上げます。（大阪府　Ｋ）

イラスト／はらぺこめがね

2023年5月15日発行（毎月刊）
母のひろば　第708号
定価50円（年600円／送料とも）
発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4181
03（5976）4402（編集）
編集発行人：大熊悟
童心社のホームページ：
https://www.doshinsha.co.jp/
デザイン：坂本梓　ロゴ：谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌（無料）と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただきますと、手続き完了となります。
購読料金は1年分600円（送料とも）。

あとがき

●小学生の頃、本は宝物でした。書店で選びに選んだ１冊を小遣いはたいて購入。タイトル・絵・造本…その頃の方が面白い本を見つける嗅覚が鋭かったようです。家でわくわくと表紙を開き、期待通りの傑作なら本棚に永久保存です。世の中の変化は激しく本を取り巻く環境も激変しますが、我々は変わらず子どもの宝物をつくっていかねばなりません。◉

●田島征彦さんの『なきむしせいとく』が第54回講談社絵本賞を受賞しました。復帰直後より40年以上沖縄に通い続け、丁寧に取材をし、その集大成として沖縄戦を描いた本作は、文字通り誰にも真似のできない絵本になりました。主人公せいとくが最後に語る言葉が、これを機により多くの人に届きますように。先生、本当におめでとうございます。Ⓝ